

## まえがき

この本は「偶然」によって生まれた。

偶然の出会いによってと言うべきかもしれない。

私は、これまで多くの偶然の出来事に導かれ、良きご縁や良き仕事へと発展することが少なくなかった。

多くの方々が同じような経験をしているのかもしれないが、偶然の出来事に気づかないままに済ませてしまうことも、世の中には当たり前前にあるのかもしれない。

私の場合は、偶然に起きたことに対する人一倍敏感な「気づき」によって、私の仕事を長く続けてこられたのだとも思っている。

偶然は実にほんの一瞬の間に、驚きや感謝や記憶などとミックスされて、脳内で処理される。消去されるか保存されるか……。私は、保存。

『映画配給プロデューサーになる!』という拙編共著を出してから、17年が経<sup>た</sup>っていた。この仕事をめざす方々に役立つ本になればと、自分の経験や具体的な事例となる自社配給作品を取り上げ、洋画の配給とはどんな仕事なのかを明らかにした一冊だ。加えて映画の仕事に関わるプロの方々にも登場していただき、自社やご自身の実践的な仕事を紹介。さらに、配給会社リストや、配給作品を上映するミニシアターのリストなどの資料もついている映画の仕事本である。

この本、果たして、読んで下さった方々が、その後配給プロデューサーになったか、私のように洋画の配給会社を作ったか、配給会社に就職したか、何らかの映画に関わる仕事をしようになったのか、本当に役に立ったのだろうか……。

最近になって、「この本を読んで役立てています」という方々からのご連絡をいただくことが増えた。なぜだろう。伺ってみると、

「自主映画を作っているので、配給・宣伝のノウハウを知りたくて」

「大学の映画の授業の教授が、参考書籍として教えてくれた。わかりやすく心に響いた。映画を作っているので、配給・宣伝のことがわかって役立った」

「この本を読んで好感を持ったので、公開が決まった作品にコメントをくれませんか」  
等々、映画作りに心血を熱く注ぐ、新進気鋭の面々から、嬉しい肉声<sup>うれ</sup>がもらえた。小さな感慨に包まれた。もう一度自分でも読み返してみた。

要するに、この手の本が少ないから、少しは役に立っているのではないかと改めて思わされた。

確かに、映画の配給プロデューサーといっても、どのような仕事なのか、また、配給やそれに伴う宣伝などについて、具体的にまとめられている本は、そう多くなさそうだ。映画論や映画監督術を述べている本は、たくさんあるのに。

しかも、それらは、偉大な映画人の偉業を語るだけのものも少なくなく、実践の現場で役立つとは限らない。

読み返して、改めて気づいたのだが、この仕事と現場は17年前から今に至るまで、その歩みは極めて遅く、仕事の内容がそうは変わっていない。

この本は映画という、言わば我々からしたら「取扱注意」のしろものを、人知れずビジネスとして扱うリアルな側面を、多面的に掘り下げた一冊だ。近年、映画の観<sup>み</sup>せ方は多様に変化しているが、映画が作られ、宣伝を施されデビューさせるまでのノウハウ、そのた

めの人為的行動、活動などはほぼ同じように営まれている。

まるで、それが「掟」<sup>おきて</sup>であるかのよう。

そんなことをつらつら考えていたところ、偶然にも、この本の編集に携わった、かつての編集者殿が、私の会社のサロン GARAGE<sup>ガラーージュ</sup>に偶然現れた。

そこは、映画上映や勉強会などをしている場で、映画以外のワークショップなどもしている。

彼は私に会いに来たわけではなかった。その場がどのような場所であるかということも知らなかったのだ。あるセミナーのゲストとして招かれての来訪であった。そこで、何気に置かれていた、編共著を見つけてしまう。

「あ、これ僕が作った本です」と言う声を、私は耳ざとく聞き逃さなかった。「どなたですか、あなたは」と、歩み寄る。偶然の一瞬から、過去、現在、未来<sup>つな</sup>が繋がった。

そうしてたちまち、私がいまだ身を置くこの世界の仕事について、改めて私自身で一冊にまとめるという構想が生まれ、ルールを敷く作業は始まった。

お互い、その後の20年近い時の流れの中での洋画配給ビジネスについて、何か役に立つ

ものを残しておけたらという、衝動と使命感のようなものにつき動かされたのかもしれない。

「『映画配給プロデューサーになる!』その後」を書き残すべきなのはと。

だが、本書はその「続編」ではない。今回は私自身の視点から、私自身が書くという意味からは、「ノウハウ本」にするつもりはなかった。

と言つて、「半生記」とか「回顧録」なんておこがましいばかり。そもそも、私の仕事は「黒子」で、知られざる仕事なのだ。その自負がまた、この仕事の喜びなのだから。業界の裏話をする立場でもない。エピソード集でもない。自慢に聞こえてもいけない。

その気にさえなれば、手がけることが可能な仕事として、ノウハウという技術的なことではなく、そのモチベーションについて伝えたい。

やる気さえあれば、きつと上手うまくいく。という気にさせる本にしよう。

「その気にさせる人」と、ある出版社のトップが、私の人となりについて語って下さったと聞こえてきた時は、何よりの褒め言葉であると嬉しかったものだったが、本書を読んで

下さった方々にも、「その気になって」ただけなら、まとめた甲斐かひもあるものだ。

映画の仕事に一足先に関わっている、一人の職業人として語りかけたい。現場からのリアルな知られざる声と言葉、それらが厚く詰まった一冊にしたいと考え、書き進めた。

そして、本書では、映画を生み出し、映画で影響力を発信するインフルエンサーたる「王様」、映画監督について改めてリスペクトしたかった。俳優たちについても述べてみた。私の連載インタビューで語って下さったことも活いかして。

そのうえで、実は、王様の座にいるのは、明日の映画の観客となる皆さんなのでもある。良き観客、フランスならシネフィルともいわれる。いや、そこまでこだわらずとも、普通に映画を観ている愛好家の方々こそ、真の王様であると思うのだ。

自由に、好きに映画三昧ができる。褒めても、文句を言っても構わないワガママな王様。我々映画を職業とするプロよりも映画に詳しく、映画へ傾ける愛は強く深いに違いない。仕事として映画に関わりたいたいと思っている方々だけでなく、そういう方々にも、本書をお届けしたいと思うのだ。

同時に、私は映画の影響力、波及力がもたらす、クリエイターや芸術家、アーティストへの刺激や啓発力の大きさにも気づかされてきた。

表現者なら誰もが鋭い審美眼を持って、映画を愛好している。

愛好しているから、ますます映画を観る眼が磨かれる。

人生や仕事になくはならないのが映画なのだとわかる。

そして、そういった方々が映画について語るリアルな声、感染力、影響力を知るにつけ、この仕事をしていて良かったと、そのたびに小さな喜びに包まれてきた。

本書では、ミニシアター・ブームに沸いた80年代、それらの映画館と一丸となって単館系洋画配給ビジネスが盛んとなり、そのライジングの時代を突っ走っていたことなどにも触れた。

監督が映画界の王様だとしても、その映画作品は配給会社が買い付けて、劇場で上映してこそ、初めて世の中に知られることも述べた。

映画の観せ方、観られ方が大きく多様化し、近年の変化も著しい。

かつてのミニシアター・ビジネスの黎明から変化していく、近年の洋画配給ビジネスと

その世界の動きをまとめることは、何となくアーカイブ的なものになりがちである。長く仕事を続け、現在も現場で活動する私だからこそ、当時の話もできるのだと、自分を励ましながらも、新鮮味を加味するための工夫に腐心して長い執筆期間が続いた。80年代、90年代、そして2000年に入っても、すぐに20年間という時空を行きつ戻りつ駆け回って。

ところが、終盤に近くなった頃、何と100年に一度といわれるパンデミックが世界を震撼しんかんさせた。このことは世界中の映画界にも大きなダメージを与え、日本も大打撃を受けている。

製作が中断され、劇場では公開を控えた新作の上映映画がストップし、劇場も一時休館となった。

私が続けている仕事の一つで、世界中の映画人にインタビューする連載も、一時中断した。試写会もリモートで、という事態が日常になっている。

こんなことを誰が予測できたであろう。この真ただ中に、私もいる。

しかし、この大事件によって、本書をまとめようという意味が急激に見えてもきたのである。

アーカイブにとどまらず、激動の今をリアルに感じながらのライブ感が生まれた。モチベーションは上がった。

偶然が、必然になった。そんなことを知らされた気がした。

それにつけても映画とは、なぜ、ここまで人を惹きつけるのか。

答えはさまざまにあつてよい。

「わたしは、これから起こることの側にいる人間でいたい。」

というこの言葉、伝説的ファッション・デザイナー、ココ・シャネル女史のものである。彼女が多くのフランス映画に貢献し支援したことは、意外に知られていない。機会あるごと、私は拙著や講演でそのことを伝えてきた。

この言葉が、映画へのリスペクトを生涯忘れなかった彼女の側面を、ひょうぼう標榜していると  
思えてならない。

「これから起こること」は、映画のことでもあるに違いない。

彼女の後塵こうじんを拝し、私自身、「これから起こる」映画の力に、いつも魅了され続けてい

たい。現場で起こることを見続けていきたいのだ。

というわけで、本書が役に立ってくれることを願いつつ、ご高覧いただけたら嬉しい。映画を仕事にして歩んだ半生を一冊にすることは、もとより無理がある。本書で述べることは、ほんの一部であることが、まとめてみてよくわかる。偏っていたり、漏れがあったりするだろう。専門家や、知識・見識が豊富な方々には、ご容赦いただきたい。

あくまで本書は、観るだけでは気が済まず、映画を職業にした者が、現場で身をもって体験したことを、今新たに掘り下げて検証と考察をした、「映画の仕事とその愛」のためのモノローグ。

笑い飛ばしながら、読んでいただけますように。